



2012/1/23
第33号
(24年1月号)

しののめ

長野県総合教育センター通信

〒399-0711 長野県塩尻市大字片丘字南唐沢 6342-4

TEL (0263) 53-8802 FAX (0263) 51-1290 E-mail kikaku@edu-ctr.pref.nagano.jp

教員研修の位相と自戒

教職教育部長 古澤 繁喜

新しい年を迎えて、皆様方の益々の御活躍を御祈念申し上げますとともに、長野県総合教育センターの様々な事業に対しまして、より一層の御協力、御支援を賜りますようお願い申し上げます。

新年早々にとお叱りを受けそうな気もいたしますが、私たちをとりまく現況について思いを巡らしますと、行く先の不確実性・不透明性が加速度的に拡散し、閉塞感が澱のように沈積していく気持ちにさせられます。学校が獲得していた様々な機能にも、現実には発生した事案に対して、本来の期待値を発揮することが出来なくなったものが増加していることは否めない事実です。このような停滞状態を一気呵成に駆逐できる原理的な方法を創造しようとしても、歴史の流れが澁のような状況を呈している現代では、その実現は不可能でしょう。しかし、学校において絶え間なく発生する個々の事案に、精神、肉体ともに辛うじて耐久性を保持して即物的な対応をしていっただけでは、自分自身を保つことすら非常に難しくなっています。耐久力が破綻したことに起因する現象が様々に見てとれるのは、このような事情からではないかと考えています。



当面の間、この状況に立ち向かうためには、形態を変化させて繰り返す個々の事案に対して、自らが文教施策の決定権者だとしたらどんな方策を講ずるのかという視点から、自前の構想力を具現化して体系的に適用させることが重要であると思います。そのうえで、教育人としての専門性を充分に発揮して、臨床的に対応していくことが実効性を表すのでしょうか。このような手法で個々の対処・実践を着実に蓄積・拡張していった結果が、閉塞状況からの離脱へと導くのではないのでしょうか。

私自身、総合教育センターにおける教員研修という位相については、実像である学校に対して、影として実像を鮮明に縁取るものという認識を持っています。それゆえ、学校でのいわゆるOJTが、全ての教員研修の盤石な基礎として位置付かなければなりません。さらに、どのような運営主体が教員研修を行うとしても、教員研修の本質として追究する事象は、「確固たる構想力に基づいた将来的な学校教育の像を創造すること。」とあわせて、「教育人として自らの専門性をより深化させること。」という理念へと収斂していくはずで

総合教育センターにおけるOJTでは、研修担当者が本質的な専門性を担保することを中核にしており、研修担当者が備えるべき最も基礎的な資質の一つとして位置付けています。つまり、実際の研修において、研修担当者は、自らが保持・追究している専門性に基づき、受講者に向けて「成熟した智の構造」を再構成して提示することが非常に大切であると考えからです。

そして、私どもの研修により学校の実像を鮮明に縁取るためには、単に皮相的な「教える技術論」に立脚したマニュアル研修では不可能であると思います。というのも、受講者は、研修担当者自身が持つ深い専門性により醸成された「学術的な精神の匂い」を個々に実感することによって、自己研鑽の出発点としなければならないからです。逆説的な言い方をすれば、今後の総合教育センターが皮相的・方法論的な「教える技術論」に偏向した研修のみを提示していくとすれば、早晩、総合教育センターの存在そのものが危うくなるでしょう。「『無智が栄えたためしはない』というのが真理であると同じように、『無智は必ず再生産される』ということも真理である。」という戒めを、次年度の研修講座の構築を進めながら、自らに課している今日この頃です。

総合教育センターにおけるOJTの1コマ

12月26日の総合教育センター所員会の中で、『総合教育センターにおいて求められる「教育の質」について』と題して、諏訪所長が行った講話のレジュメです。
(当日の講話内容と資料を添付ファイルにしてあります)

総合教育センターにおいて求められる「教育の質」について

大前提としての観点

- 1 学校現場が抱える諸教育課題や教員個人の関心やニーズの正確な捉え
具体的な情報の収集方法と収集情報について部及び所として共有する
- 2 教員に求められる能力の開発
求められる能力を明確化し、研修で育成する具体的方法を設定する
- 3 教育に求められている組織力
学校組織の課題を明確化し、研修で改善の方向について具現化する

- 1 「方向性の質」・・・**研修の向こうに存在する学校や児童生徒を常に意識する**
 - A 研修を、どこにつなげるか、つながるかという連続性
 - I 研修の目的と着地点の明確性と合理的理由
 - ウ 研修において、具体的につけようとする力の明確さ
 - E 研修の目標と手段の峻別
- 2 「構造の質」・・・**センター全体が機能し力を発揮する協働性を意識する**
 - A 教員個人としても学校組織としても求められる質の向上
 - I 研修の方向性の質を支えるためにつくりだすべき構造やシステムの構築
テキスト内容、参考教材の紹介、集団形成方法、適切な評価方法
講座設定（継続性、計画性、企画性）
 - ウ 教員も主事も自ら学ぶ力につながる仕掛けづくり
- 3 「過程の質」・・・**「ねらい」「めりはり」「見とどけ」をしっかりと意識する**
 - A 受講者の修得確認と学習活動との実際的なサイクル（講義と演習、実習）
 - I 受講者の全員参加、全員が考え、全員が発言するというようなプレゼン場面の策定
例：ディベート、ディスカッション、パネルディスカッション等の導入
 - ウ 講師自らの立ち位置の変容性 ⇔ 研修の目的と講師の位置づけの明確化
- 4 「成果の質」・・・**児童生徒につながる研修内容を意識する**
 - A 講座終了時のアンケート結果の分析 ⇔ 研修目標を構成する要素別の考察
 - I 成果の検証、当初の目標と照らし合わせての検証
 - ウ 研修成果の追跡（具体的なアウトカム評価の実施、聞き取り調査）

この四つの構造をセットに考えたとき、出てくるものが

- A 経済産業省の「社会人基礎力」でうたう3つの能力と12の能力要素
- B 厚生労働省の「就職基礎能力」
- C OECDの「キーコンピテンシー」としての「能力論」 など

どれもキャリアに関するものだが、中心には人間関係力の育成が不可欠という共通項がある。

「評価」に当たる英語： Assessment Evaluation Appreciation

研修講座探訪

12月に行われた希望研修講座を紹介します

【カリキュラム・マネジメント】 12月2日（金）実施 （16名受講）

<講座の内容>

信州大学全学教育機構特任教授 井出忠臣 先生を講師としてお迎えし、開講しました。

① 講義「カリキュラム・マネジメントの基本と実際」

カリキュラム・マネジメントに取り組むと生まれる「壁」。その一つ一つが貴重な課題・「宝」であり、真摯に向き合うのは学校でしかできない実践研究であることを、具体的な実践をもとに話されました。日々の教育活動の中に、たくさんの「宝」があることが見え、実践への意欲が高まりました。井出先生が講義の中で話されたたくさんの実践の中から、ある先生の悩みをもとにワークショップを実施した時の様子を紹介します。

<ノートの記録を評価するワークショップについて、教頭が記した日報から>

「君の算数ノートをめぐって「この子の育ちは何か」を検討し合ったワークショップがとても充実してよかったと思われた先生方が多かった……

ある先生の言葉「最初は具体物を描きながら考えているけど、次には〇（半具体物）に置きかえて問題を解いている」に「へえ、自分には気付かなかったとらえだ」と感想をもつ先生。

また、ある先生の言葉「『～して、それから～して』と考える筋道が立っている」「『～だから～』と根拠を明らかにしている。思考が育っているね」そんな語り合いに、「おぼろげだった自分の見方がはっきりしてきた」と感想をもつ先生。

この充実感なぜか。私たち自身が「学び」を実感したからではないだろうか。

<受講者の感想から>

- ・とても分かりやすいお話で、カリキュラム・マネジメントとは何か、どうするべきかということが理解できました。困ったり上手くいかなかったりすることこそ宝であり、可能性であるという先生の言葉に、挑戦してみようという勇気と安心をいただきました。

② 研究協議「学力調査から見える課題と、自校のカリキュラム・マネジメントの困難点」

③ 演習「自校のカリキュラム・マネジメント改善への一歩」



課題を共有し、アイデアを出し合う



どの考えも大切にしながら「次の一歩」を構想



チームとして自校の取組をプレゼンテーション

<受講者の感想から>

- ・同じ立場であるからこそ腹をわって言えることもあり、だからこそ本当に知りたいことがわかりました。さらなる実践を持ち寄り、カリキュラム・マネジメントを学び合いたい。

研修講座探訪

10月・11月に行われた生徒指導希望研修講座を紹介します

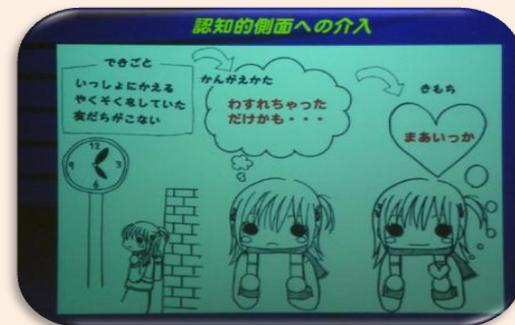
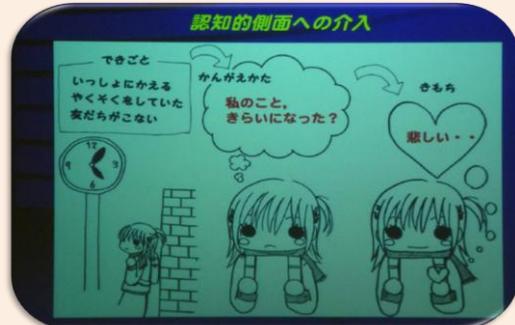
【ストレスマネジメント教育の理論と実践 10月6日(木) 実施 (77名受講) ～学校不適應を防ぐ認知行動的アプローチ～】

<講座の主な内容>

- ①心理学における児童生徒理解
- ②学校における集団形式の認知行動療法
- ③さまざまなストレス反応と症例
- ④ストレスの枠組みから理解する学校不適應問題
- ⑤学校で実践できるストレスマネジメント教育のエクササイズ演習

<受講者の感想から>

- ・具体的な事例をたくさん出しながら説明をいただき、とてもわかりやすかった。
- ・認知行動という、今まで考えたことのなかったことを学び、とても参考になった。
- ・もう一度自分自身でしっかり復習して、学級はもちろん、保護者会でも学んだことを取り入れてみたい。
- ・ストレスの対処方法や段階別のアプローチ方法を学ぶことができ、また、すぐに実践できるものばかりだったので、学校でぜひやってみたい。



【いじめのとりえと具体的対応 11月7日(月) 実施 (76名受講) ～子どもの感情の育ちからみた「いじめ問題」～】



<講座の主な内容>

- ①感情制御機能の発達モデルと発達不全問題
- ②脳構造と感情の社会化プロセス
- ③感情制御機能といじめ
- ④現代社会と深刻化するいじめ
- ⑤教室におけるネガティブ感情の扱い方(演習)
- ⑥いじめを防ぐ教師の日常的関わり

<受講者の感想から>

- ・いじめに対して、子どもたちの感情面からのアセスメントの重要性を認識した。ネガティブ感情を安心感で包み込めるような学級経営をしていきたい。
- ・具体的な対応方法を、ロールプレイなどを通して教えていただき実感できたので、生かしていきたい。
- ・具体的な例がたくさんありとてもわかりやすかった。いじめと感情制御の話や、ネガティブ感情を「大事な気持ち箱」に入れる対応方法など、目からうろこの講義だった。



教職教育部が12、1月に実施した研修講座から2講座を振り返ります

◇義務初任者研修 「冬期宿泊研修A・B」

1月4日(水)・5日(木)に小学校種、1月5日(木)・6日(金)に中学校・特別支援学校種、1泊2日の初任者研修冬期宿泊研修が行われました。開講式の教職教育部古澤繁喜部長の挨拶では、「開かれた自分であってほしい。仕事に自分を合わせていく。」と教職の特殊性を踏まえて、研修を続ける上での心得を話されました。

1日目午前に行われた教科教育部高野正延部長の講義・演習「初任者研修のまとめにむけて～2年目に向けての私の授業～」では、「教育は人なり. 目の前にいる先生が一番の学習環境である。」という言葉を受け止め、児童生徒に先生と認めてもらえているか見つめ直しました。そして、授業や学級づくりにこれから取り組みたい具体のいくつかを紹介いただきました。ポイントとして、「子どもの姿を思い浮かべながら行う」誠実な姿勢がいつになっても必要となることを学びました。演習では、「2年目に向けての私の授業」をテーマに、少人数でグループ協議をしました。



グループ協議・発表

次に1日目午後前半は、上田市立第三中学校教頭松島恒志先生の講義「学校における情報セキュリティと情報モラル教育」が行われました。まず「学校における情報セキュリティの基礎」でUSBメモリのデータ管理を取り上げると、情報セキュリティへの認識の甘さを痛感した初任者が多く見られ、改めて一人一人の意識改革が急務であることを学びました。続いて「学校における情報モラル教育」では、現在の中・高校生の実態を「知ること」、そこから「知恵を磨く」指導に加え「心を磨く」指導まで、ポイントは禁止・制限を強調せず、理解を示し、心をゆさぶる指導をすることを学びました。例として、数分に編集したビデオ教材を準備し、「あなたが大事」と伝えたところ心を開いた生徒の事例を示していただきました。

1日目午後後半は、生徒指導・特別支援教育部金田弘子部長の講義「いじめをなくすために私にできること」が行われました。ゲーム「ゲー・チョコキ・パーじゃんけん」で体と心をほぐした後、講義に移りました。「いじめをなくすために」、「いじめはなぜ起こるのか」いじめる側が抱える課題から見ると、自己制御と感情制御の発達不全の問題があり、対応のひとつとして、大人に承認されることでネガティブな感情も育ててはいけないことを学びました。初任者は、学校で「痛くない!」「泣かない!」などの厳しい言動で児童の不快感情を閉じ込めて来なかったか見返しました。続いて「いじめへの対応」では、「早期発見・早期対応、組織的対応、開発・予防的な生徒指導」を実践するために、授業・日常でいじめを発生させない環境をつくるとともに、小さなサインを見逃さず、すぐに周りの先生方と相談し対応することを再認識しました。具体的な対応のしかたやチェック法を10ページにわたる資料で示していただき、今後の実践に活用できる内容でした。



体と心ほぐしゲーム



豊富な実践例を語る田中先生

2日目は、波田町立(現松本市立)波田小学校元校長田中光顕先生の講義・演習「学級経営と児童・生徒理解～教科・教材・教具づくり」が行われました。研修室内には、田中先生の手描き、手作りの教材や掲示物にあふれ、温かな雰囲気の中で研修が始まりました。まず、初任研学級開きと題し、田中先生が担任となり、学級開きを実演されました。その時に話す教育方針について、端的に五七五で表現する演習を行いました。初任者は自分の教育観と向き合う時間

となりました。ある初任者は学級経営方針から「夢を持ち、全力尽くし、思いやり」と整え発表しました。学級開きにつき「いのちの5日間」で取り組む「学級経営の5つの原理」について講義されました。初任者は、田中先生の具体的な実践例を聞き、全員参加の目標・規律づくり、ぶれない叱り方、(子ども理解は)遊びがすべて、志の高いクラス、子どもと共に創る授業など学級を創る魅力をたくさん感じました。さらに、初任から記録した2年目の教師の授業風景をビデオで見ました。その教師の穏やかなまなざしと笑顔、子どもが教え合う授業の様子からは、教師の「からだ」が自然と子どもに沿える「からだ」となっている理想の姿を学ぶことができました。学級経営の基礎を学んだ後、時間をかけて「自己課題の認識と解決」の演習に取り組みました。田中先生が自分を開くことが大事と話され、悩みや課題を語り合う時間によって、心が軽くなったと初任者は話してくれました。

午後は、学級の中核活動となる子どもと共に創る授業の実際を豊富な具体物を紹介して語る田中先生の熱意に刺激を受け、初任者の心に残る講義となりました。午後の後半では、同学年・同教科ごとの小グループで互いに持ち寄った実践や教材を紹介し合う演習を行いました。



教材・教具づくり演習の様子



「まなざしの輪」

最後に、初任研帰りの会と題して、小グループ内で相手のいいところをメッセージにした「まなざしの輪」を交換し、元気をもらって笑顔で研修を終えました。

<受講者の感想から>

- ・ 子どもが安心して学校生活を送るために教師として何をすべきか具体的に考えていきたいと思った。特に、子どもにとって教師は環境そのものであるというお話は、身が引き締まる思いだった。怠ることなく自分を磨いていきたいと改めて感じた。
- ・ 具体的な実践のお話が多く、すぐにでもやってみたい！と思うことが多かったので、3学期からすぐに生かしていきたいです。教室掲示や教具なども工夫して作りたいと思いました。頑張りたいです。

◇高等学校初任者研修「教職基礎研修VI」

12月13日(火)に高等学校初任者研修「教職基礎研修VI」が行われました。阿智高校藤田佳弘校長の講義「学校組織とホームルーム経営」では、新任の頃からの数々の経験を基に、教師としての実践や信条などについて話され、受講者は学級担任としての心がけや素晴らしさについて理解するとともに、学校組織の中で学級担任が果たすべき役割についても学びました。次に、高遠高校勝田留加教諭の実践発表「私の迷いと苦悩と喜び」により、4月の入学式を迎えるまでの準備や入学式当日を始めとして年度当初に力を入れたことなど、二年目の先生のホームルーム経営実践について学びました。さらに、箕輪進修高校福澤香養護教諭の実践発表「保健室からみた高校生の現状」により、統合失調、自傷、結核及び性等に関する事例や対応について理解するとともに、教師自身の体調管理の大切さを学ぶことができました。ホームルーム経営やホームルーム担任のために、有意義な研修となりました。

<受講者の感想から>

- ・ 信念をもってホームルーム経営にあたるのが大切だと感じた。良いと思うことを思い切りやってみたい。生徒には「正しい生活」を身に付けさせるのが大切な役割だと思った。学校組織の中では、報告・連絡・相談が大切であると理解できた。
- ・ 生徒の良いところを褒め、保護者との連携を密にしながら担任を務めていらっしゃる姿が素晴らしいと思いました。うまくいかないことも周囲の先生方と協力して乗り切っている姿は、大変参考になりました。
- ・ 自分にはあまり専門知識がなく、生徒の心身の健康のためには、養護教諭の先生と協調・連携することが大切であると強く感じた。心身の問題を抱えた生徒はより増加することが予想されるし、研修がより必要と思う。



阿智高校 藤田校長先生の講義

平成 23 年度研修講座受講後のアンケート調査結果

企画開発部

総合教育センターでは、各学校の教育活動の充実につながる研修講座となるよう、その改善に向けたアンケート調査を行いました。抽出校におきましては、大変お忙しい中アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。その結果をまとめましたので、報告いたします。

1 実施時期 平成 23 年 11 月 18 日（金）～12 月 16 日（金）

2 調査対象者

(1) 受講者 816 名（回収率 86.6% 回答数 707 名）

平成 23 年 9 月～11 月に実施した研修講座より 30%にあたる研修講座(56 講座)を抽出し、その全受講者を対象とした。

(2) 学校長 のべ 816 名（回収率 81.1% 回答数 662 名）

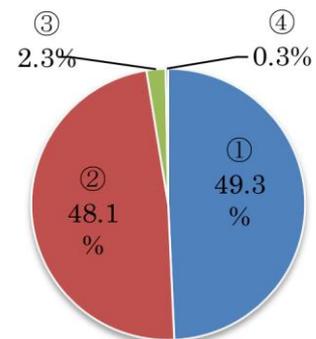
平成 23 年 9 月～11 月に実施した研修講座より抽出した研修講座（56 講座）の全受講者の所属学校長を対象とした。（調査対象の受講者一人一人について、対象講座の研修内容が授業改善等にどのように役立ったかを回答していただいた。）

3 アンケート結果と考察

(1) 研修講座を受講して

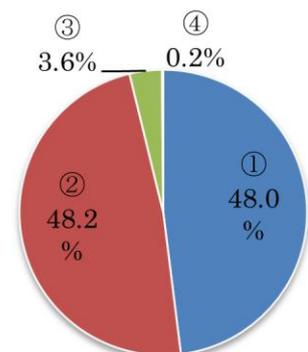
① 受講した研修内容は、その後の授業、学級経営、生徒指導、校務等の実践や研究に役立ったか。（受講者）

回答項目	回答数(人)	割合(%)	H22 割合(%)
①大変役立った	348	49.3	49.7
②役立った	340	48.1	44.8
③あまり役立たなかった	16	2.3	5.3
④役立たなかった	2	0.3	0.2



② 対象者が受講した対象講座の内容は、学校経営、校内の授業、生徒指導、校務等の実践や研究に役立ったか。（学校長）

回答項目	回答数(人)	割合(%)
①大変役立った	318	48.0
②役立った	319	48.2
③あまり役立たなかった	24	3.6
④役立たなかった	1	0.2



研修講座の内容について、受講者の 97.4%、学校長の 96.2%から、「大変役立った」「役立った」との回答をいただきました。全般として、研修講座の内容が、学校や教職員のニーズに合い、学校で活用されるものになっていたことがうかがえます。

この他の記述等のアンケートも参考に、来年度は研修の目的をより明確にし、研修の成果が学校運営により還元されるような講座運営を目指して参ります。